苫小牧
蔦森山林の今昔

◉蔦森　春明

今、苫東と呼ばれている広漠とした一帯にひときわ目に立つ緑の森がある。蔦森山林がそれだが、この緑の一角はどのようにして出来たか。そこには、この北海道のなかでもことに厳しいとされ、樹林の成立には向かないとされた条件のもとでの一つの物語がある。この一文は、山林の経営者であった蔦森春明氏の話を、苫小牧東部開発株式会社がまとめたものを、その了解を得てリライトしたものである。

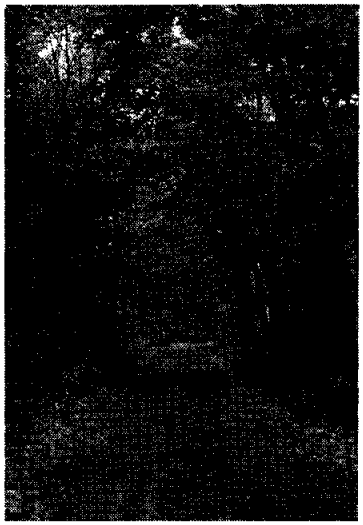
日露戦争から戻った、蔦森春明氏の父君百一氏が苫小牧の静川に七百五十ヘクタールの山林を買ったのは大正二年であったが、山林といってもそこはすでに函館駐在のイギリス領事の関係する「キング商会」によっておかたの大木が伐採された跡であった。キング商会は、ここに木工場を構えて周辺のナラの木を伐採・製材し、英国へおくっていたという。北海道のナラ材は、ウィスキー貯蔵の樽や、高級家具用として第一級とされ、また当時の英国の金持ちに「最後のぜいたく」と言わせた優れた柩材でもあった。

父百一氏は、残された若い雑木林で、とりあえずの現金収入につながる炭焼きを始め、多い時には三十枚ほどの炭竈を構えたという。

製品は馬車で遠浅へ出したが、道もまだ満足なものでなかったから一日一往復がやっとだったという。

大正初期の木炭ブームは静川地区や周辺に製炭業を営む多くの人々を集め、多い時には五十戸を数えたと言われるが、それも次第にほかの土地へ材を求めて移っていった。

百一氏は、大正初期から炭焼きだけでなく水田耕作も始め、やがて牧場も開くようになった。水田耕作は単に米の生産だけでなく、北と南に分かれる山林の火防線としても重要な役割を果たすものだった。



▲蔦森山林の林内

▲▼山林の入口付近

その後、北海道鉄道金山線（現在の道道敷地）が通ることになったとき、百一氏はその会社の大株主になる一方、ニナルカ駅を設けることを条件に、この水田用地の一部を無償で譲渡した。

この頃、柏原には二千六百ヘクタールの面積のある松田牧場などがあって、主に軍馬の生産にあたっていた。また、安藤沼周辺ではその名の由来する安藤氏が水田耕作をおこなっていた。

キング商会の伐採跡地には直径六十から九十センチの切り株がたくさん残っていた。このようなところからみると、このあたりの昔の姿は大きなナラを主とした、うっそうとした森林だったと思われる。苫小牧から勇払にかけては確かに条件の厳しいところではあるが、けっして、大きな木の育たないところばかりではないことが判る。

不思議なことには、それらの切り株の切り口はいずれも四尺（一・二メートル）位の高さであった。これは、材として狂いの生じやすい根元の部分をあらかじめ捨てた結果であろうと考えられた。しかし、この残り株から「根っ子炭」という優良な炭を造ることができたという。

戦時中は軍事用の伐採を余儀なくされたが、戦後はきめ細かな造林が続けられた。山林の北西側にはトドマツなどの常緑樹が多く植えられて山林のアクセントとなっているが、このほかにもストローブマツなど、かなり多くの樹種がよく土地の条件に合わせて配植された。一種の小林分施業であるといえようか。

静川台地はやや地形が入り組んでいるが、それらの地形を生かして森林を配置すれば、ここでも立派な緑地の造成も不可能ではないと思われるのである。